

北支各地に転戦して

高知県 大和 正一

昭和十七（一九四二）年一月十日、高知朝倉の歩兵第四十四連隊（西部第三十四部隊）へ入営しましたが、四カ月前に痔の手術をしたのが治癒しておらず、その後遺症のため間もなく帰宅を命ぜられました。

当時、大東亜戦争開戦直後のこと、大勝に沸く街々の中をすごすごと家に帰り着いたのです。当時とすれば、あれだけ歓呼の声に送られた私、何でおめおめと家の敷居がまたげましょうか。大きな顔をして到底家にはおられません。部落の片隅に身をひそめて毎日を送り、恥かきの日々でした。

治療に努めた甲斐もあり、ようやく軍務に耐えられそうな体に回復、昭和十八年一月十日、一年前に入隊した西部第三十四部隊、第二大隊第六中隊第二小隊に入営したのです。とにかく、やっと兵隊になり、世間

様に顔向けできると安堵したのです。

忘れもしない三月十日、朝倉駅を出発、下関出航、しかし、玄界灘は大しけ、駆逐艦護衛のもと、大波を乗り切り早朝に釜山港に上陸することができました。戦友の多くは船中にて大バテ、勿論食事ものをどを通らぬし、疲れ果てていました。私は船に強かったのか案外苦しまず上陸することができました。船酔いというのは下船すれば治るという通り、全員無事に列車に乗り北上したのです。

四月三日、鮮満国境を通過。四月七日、満州東安省虎林着。古参兵の歓迎を受け、虎林第五百部隊第二大隊第六中隊入隊。中隊長は同郷高知県佐川出身の篠原中尉殿でした。

部隊は関東軍の精鋭とのことで、国境の向こうはソ連領であり、いつ、対ソ戦があるか分からないと、部隊での我々初年兵の訓練はきびしく、一年は猛演習の連続でした。零下何十度という厳しい冬を越え、春のさざしが見えはじめ、我々もようやく二年兵となりました。

昭和十九年三月、ソ満国境警備第三大隊と警備交替の移動の命があり、虎林発滿支国境を通過し北支の天津に着き、独立混成部隊が編成されました。私は第三大隊長山内大尉（沖繩出身）の第五中隊第二小隊に配属になりました。小隊長は京都出身の西村少尉でした。

滿支国境を越え蒙古に着いたのですが、その途中、匪賊討伐に参加しました。滿州は国境警備で緊張の連続でしたし、訓練もきびしい毎日でしたが、ここで最初の銃撃戦の体験をしました。銃弾のピュンピュンという音が聞こえると、自然と安全な所へ行こうとします。「こんな弾は近くではない」と古参兵に叱られましたが、そのうちに、弾の音の近い、遠いも覚えめました。危ないやら面白いやらの戦闘でした。このようにして我々は戦闘訓練を自然に経験していったのです。その後、匪賊ばかりでなく、共産八路军とも戦闘を交えたことも度々ありました。

続いて蒙古に駐留となりました。隊には北海道出身の小林正一兵長、私こと大和正一 一等兵がおり、小林

兵長は清水次郎長時代の子分である小政（正）、私は小林兵長より大きかったので大政（正）と言われ大変お世話になりましたが、途中編成替えとなり、別れ別れになりました。

蒙疆に進駐して三カ月ぐらいして、南方への作戦があると集結を命ぜられ、再び天津に移動を命ぜられました。これが河南作戦という大作戦になるのだとは、我々兵隊には分かりませんでした。後に聞いたり、戦後分かったことですが、同じ時期中支では湘桂作戦があり、また南方へは北・中支から数個師団が転出したのでした。

我々の部隊は、一時天津に下り、昭和十九年夏頃、河南作戦に参加したのです。滿州から北支へ、更に内蒙古へ、そして再び北支から南下ですから、相当にきびしい戦闘と行軍、そして移動であり、私らも何か緊迫した日々の連続でした。特に編成替えというのは、今までの戦友や上官とも別れ別れになり、任務も異なってきました。命令というものはそういうもので、我々は命令のままに日々動くのです。

もう五十余年前のことで、大分記憶が薄れたことも多いのですが、天津で編成されたのは独立混成の部隊で、私の編入されたのは第三大隊山内大尉（沖繩出身）、第五中隊西村少尉（京都府出身）でした。毎日のように敗残兵の討伐をしつつの戦闘参加でした。

もうその頃になると、初年兵当時や初陣の時と異なり、弾丸慣れというか、近い弾、遠い弾の区別もその音で判断できるようになっていました。そのような時期に後期の河南作戦に参加したのです。

開封、信陽を早朝に出発し、高山台占領の命令があり、行軍中スパイに通報されたのか、こちらの行動が敵に分かってしまい、山中で大激戦となってしまいました。

小隊長代理の傍士軍曹（下田出身）は一個分隊で台地を占領。軍曹は命令どおり占拠でき、一安心だったのか、タバコを一本吸っていたわずかの時間に敵兵から狙撃され、頭部貫通で戦死されてしまいました。瞬間の出来事、しかも私の間近であり、人の命のはかなさをつくづく感じました。

しかし、敵との戦闘はますますきびしく、止むを得ず下山し、死体を茶毘に付することも出来ず、手首を関節の所から切断、火葬にして、そのお骨を身につけて移動しました。兵隊は勿論、輸送に使っていた牛・馬も倒れる強行軍で、空からは敵戦闘機の機銃掃射を再三にわたって受けつつの行動でした。

鄭州を先行部隊が占領していても、残敵は多くて逆襲を受けますので、これを排除しつつの行軍です。敵は空からだけではなく、夜間行動中「ドカン、ドカン」と地雷が爆発します。敵は退却前に、街道の要所所に地雷を布設し、我が軍の進撃を阻止するので、この夜間行動中、戦友四人が戦死してしまいました。

敵機の銃爆撃は昼間だけではなく夜間もありました。敵は我が軍の洛陽攻略を懸命に阻止しているのでした。この敵を撃破しつつ、我が隊はようやく洛陽の郊外に到着出来ました。この間、敵の防戦は勿論ですが、強行軍のつらさは格別でした。行軍中、前方で銃砲声がすると、戦闘が始まったので、後方の部隊は一

時休むことが出来ず。生死を分ける戦闘も大変ですが、行軍もつらいのです。これは、体験者でないと思えないものです。

洛陽の街は、故郷高知市ぐらいの広さかと思えますが、周囲は要壁で囲まれ、我々の侵入を拒んでいません。周囲の畑には塹壕やトーチカがあり、民家も全部要塞化しています。地下には地下道があります。我々はその要塞を突破しなければ洛陽城内に入ることは出来ません。数個師・旅団で包囲し、何回攻撃しても全滅に近い損害を受けます。我が部隊も、外郭陣地が強くて侵入することが出来ません。いよいよその攻撃を、我が第三大隊（山内大隊長）が命令を受けました。

私の小隊も出撃、私達は麦畑の中にもぐり込みましたが、敵からの射撃は雨が降るような弾音の中での戦いでした。福井県出身の広瀬君が右腕上膊部を撃たれたので私が止血し、後退させました。続いて一人の戦友が大腿部貫通出血多量で倒れましたが、その時、かすかな声で「お母さん」と言って絶命してしまいました。

た。このような戦闘が三、四時間続きましたが、敵陣を突破出来ず後退しなければなりませんでした。

翌日、山内大隊長は命を受け「強行作戦に出る」と決意し、再度の攻撃命令を出されました。当然我が小隊も命令を受けたのです。前日、大隊、中隊が全滅、攻撃頓挫の地に行けば兵を死なすだけであるので、西村小隊長はある決意されたのです。その時、小隊長の当番兵が腰痛であったので、私が交替勤務して行きました。小隊長は「大和、お前は俺の女房役であるから、行動を共にせよ」と言われました。私は即座に「ハイ、行きます」と引き受けました。

西村少尉は「一個大隊全滅の所へ、一個小隊で攻めても死に行くようなものだ。お前と二人で攻めるより方法がない」と決意、その旨を大隊長に進言し許されました。私は戦友とも支那酒で別れの盃を交わし、父母に対しても、心の中で別れの挨拶をしました。黙想すれば、父より母の面影が浮かんできました。父には申し訳ないが、母の昔流の軍艦型の髪型が、本当に脳裏にはっきりと残っていました。心の中で「長らく

お世話になりました。今から国のため、軍のため、戦友のために決死隊に出ます。兄は生還するであろうからよろしく」と語りました。

午前四時頃、手榴弾を五個渡され、一個は自決用とし、援護射撃を受けながら出撃です。後方からの援護射撃、迫撃砲、機関銃の支援を受け、西村少尉と鉄條網を一段、二段と切り、第三段目を切断した時に敵の迫撃砲の弾が飛来しましたが、第四段網を切断、トーチカの銃眼から手榴弾を投げ込み、占領の突破口を開きました。第三大隊は敵陣一番乗りの功績をあげることが出来たのです。

その後の、「洛陽攻撃功績調査」にて、西村少尉と小生は殊勲甲、兵である小生に「勲八等白色桐葉章、功六級金鷄勲章」授与の知らせがあり、その書類もありましたが、終戦後、駐留地許昌で、戦友から「その書類が見付かると帰還出来なくなる」と言われ、中国軍の私物検査前に焼却してしまいました。今となっては、その殊勲甲の証明も消えてしまったわけです。

洛陽攻略、入城後、各隊はそれぞれ残敵との掃討戦

を続けたのですが、その戦いの最中、広瀬見習士官は腹部貫通銃創で戦死されました。夜間、彼も「お母さん」の一言を残し戦死されました。やっぱり母性愛は強いものと実感したのです。

その後、部隊は目的地西安（共産軍の本拠）に向け進撃を開始しました。

今、思い出しますと、傍士軍曹他八人で高地に登りました、敵の情報察知による大襲撃は、洛陽攻略戦のような大作戦ではありませんでしたが、高台占領戦闘で恩賜のタバコを皆に配ってくれ、一服吸ったとたん、狙撃により戦死した軍曹の姿が眼に浮かびます。そのような小戦闘でも尊い命が一瞬にして消えました。また、私は西村少尉と二人で、本当に死ぬつもりで鉄條網を切断した洛陽攻略戦でも死なずに済みました。まことに、軍隊は連隊だと思えます。たしかに、殊勲甲の証の金鷄勲章の勲記も、現物も見なかったことは残念に思いますが、戦死された戦友や士官の顔や戦死状況を忘れることは出来ません。

その後、私の部隊は延安近くの高地に進撃しました。私は大隊本部付当番を命ぜられ、移動中でも再三再四敵機（米軍機）の攻撃を受け、山岳の中に入り行動していました。その間も、時に共産八路軍や蒋介石軍の銃・砲撃を受け応戦を続けておりました。

そんな状況のある日（今思えば昭和二十年八月十五日頃か）、白旗を掲げた敵の將校が接近して来ました。私達は敵が降参して来たのかと一瞬思いました。大隊長も「敵が日本軍に降伏の合図ではないか」と申されたので、我々は射撃を止めて待ち伏せしていました。ところがこの敵の將校は「日本軍は今日降伏した。日本軍には絶対危害を与えないと、蒋介石総統の命令がでている」と言う。本当に驚きました。「信じられない」皆もそう思っていたと思います。「日本軍に降伏という言葉はない」「我々は戦闘で負けてはいない」と、ただただ啞然とするばかりでした。

部隊長が兵団に確認するため早速通信隊に連絡を命ずると「天皇陛下の放送があるから聞くように」とのことでした。降伏は事実でした。全員無言が続き「自

決か、降伏か」どちらをとるのだろうかと思いでいました。我々の結論も二つに分かれました。敵の將校は「日本軍とは戦争したが、君達はこれから日本の国に帰り、父母に面会出来る、我々はまたこれから戦闘せねばならないのです、皆さん元気で帰りなさい」と言い残して帰って行きました。

今まで撃ち合った敵であるのに、敵愾心もなく紳士的な態度でした。これは蒋介石総統の「我々敵に対し、徳を以て処する」という命令があったからでしょう。そして、敵將校が「我々はこれから戦闘しなければならぬ」と言ったのは、国民政府蒋介石軍は、共産八路軍と戦うということをその後知りました。北支那では日中停戦と同時に「国・共の戦い」が始まっているのでした。

我々は戦いを止めて、敗戦の兵百人ぐらいで命により目的の地許昌に向かい、昼夜兼行の行軍に出発しました。一カ月余りの行軍により許昌に着きましたが、許昌には数千人の兵員が集結しておりました。

途中、山岳地にいた八路军も次々に南下してしました。我々は、昨日まで敵であった蔣介石の正規軍と「昨日の敵は今日の友」の歌のごとく親しくなり、宿営地も同じくしての行軍を続けました。八路军は我々と一キロぐらい離れながら、追尾するように行軍していました。正規軍の将兵と片言や筆談を交じえて話をしましたが、正規軍は「これからも八路军と戦闘せねばならないが、日本兵は日本に帰り父母に会うがよい」と、終戦を知らせに来た時の敵の将校と同じことを言っていました。

我々の部隊は集結地で徐々に武装解除されましたが、その後も大変な苦勞をしました。けれども先程申したように、蔣介石総統から「日本軍に危害を与えるな」の布告もあり、状況も次第に安定し、許昌の住民とも心を通じるようになりました。その間の約六カ月は、街の道路の修復作業に従事して、飲食物も何とか与えられていましたが、デマ報道にて十数回帰還命令があり、その都度、また嘘であったか、またデマであったかと、喜びと落胆を繰り返していましたが、昭

和二十一年五月、上海乗船の命令があり出発しました。しかし、我々は本当に日本に帰れるのだろうか、南方の戦場整理をさせられるらしい、など種々のデマ報道がありました。

いよいよ乗船し、日本の船員の話聞くことができ、その時、ようやく「日本に上陸出来るなあ」と胸を躍らせる喜びを感じました。このようにして父母のもとへ帰ることが出来たのですが、今の若い人達は「中国で戦った日本軍に対し、日本の士官学校を卒業した蔣介石総統が、暴に對するに徳をもって報いた」ことを知る人は少ないのではないかと思えます。同じ人類でありながら、長い間、悲劇的な戦争を繰り返したものです。私は戦死者の霊に祈念を捧げると共に、戦傷病者の戦後の御苦勞と戦友との友情に対して感謝をしている日々であります。